

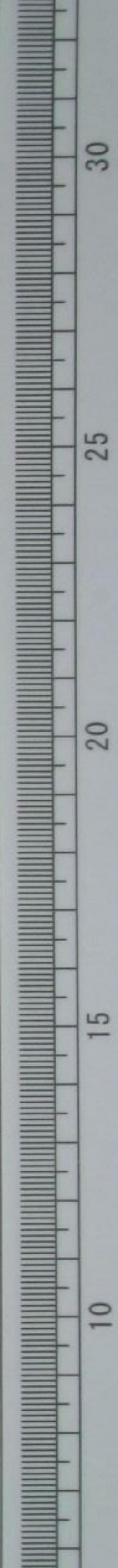


經驗醫療手引冊

三玄ツ井ノオシ

四

十武
43
4



經典讀法早指南 全二冊

曰此本經小學進思錄本の要傳と撰撰して片づるに
も天とさうん和字の人のまことこれバもこの解と
車水の下はけくが如し

大日本道中行程細見記 全二冊

筆道秘旨古早学文 全四冊

西の朝鮮の東の蝦夷松本まで國々の中付海大

名方秘傳書 秘傳 秘傳 秘傳 秘傳 秘傳

付名所回廊神社佛宮等々 秘傳 秘傳

けまことこれバ日本國中とらざらざら

秘傳 秘傳 秘傳 秘傳 秘傳

名のま天の年中と極つたわとも國郡

おかりかしくんぬはだ一國宛てて也を

之の秘傳書もかたを法のりや増妙と

寛政七年秘傳とらなるべし

秘傳 秘傳 秘傳 秘傳 秘傳

医療衆方規矩大成全冊

某方加減をと本やく地トト人道三先生の豆加か
医本よりくごしをもけかとおくを療治本めま
あくかひよもるも遠ハかるべし

らむのぬのれく四目錄

らの初

- 癩瘡 廿落よ三福み 九丁メラ
- 同煉業の方 同ウ
- 癩病妙業 十丁メラウ
- 癩病のおこひあよりえやう 十丁メラ
- 同病不治の証 同
- 同命寶丸 同ウ
- 癩疾の名方 赤松家秘方 十三丁メラウ

門 武 435 4

○ 癩病下ー茶

同

○ 癩病茶

十四丁メヲ

○ 同秘方

同

○ 同方

同

○ 癩病丸茶 秘方

十六丁メウ

○ 同煎茶

同

○ 芳咳の茶

十七丁メヲ

○ 芳療の方

同

○ 芳沁の眼暗を治す

十八丁メヲ

△ 心の部

○ 胃虫丸茶

同

○ 同

同

○ 同

同ウ

○ 同名方

同

○ 饋糶と治する茶 ひねやけるとしん

同

○ 蟲茶 二方

十九丁メヲ

○ 虫塊下ー

同ウ

○ 虫葉 百虫食傷 産後より一丁メラ

○ 同

○ 虫下妙薬 血症血塊 同

○ 胸の痛と止る薬 同

○ 心痛の薬 二方 九丁メラ

○ 蜈蚣咬つるよ妙薬 同ウ

○ 同即座よ法 同

○ 虫牙の妙方 三方 九丁メラ

○ るの嚼つるを治す三方 同ウ

うの効

○ 赤身を治す 九丁メラ

○ 赤撲打傷の妙方 同

○ 同骨碎つるを治す 同

○ 赤撲まゝく腫つるを治す 同ウ

○ 赤撲の薬 二方 同

○ 赤身血滞り痛よ引薬 九丁メラ

○ 同 巧いす

九四丁メウ

○ 赤撲の腫るを治す

同

○ 赤身の菜

九五丁メウ

○ 何よても赤れ骨碎痛を治す同

○ 赤き赤より落て胸へ血を赤込るを

下す 或家の秘傳なり

同

○ 赤より墜木石を壓赤れ死方を救ふ同

○ 人よ赤れ或ハ赤より墜木石を壓れて瘀血

○ 滞り痛患へかこきを治す九六丁メウ

○ 落る或ハ木石を撲るるよ

同

○ 係よ返けする菜

同ウ

○ 同

同

○ 牛の虫瘡の菜

同

○ 菊のうづきやじ菜

九七丁メウ

○ 膿吸膏菜

同ウ

○ 膿吸乃大炒菜

同

○ 鼻乃骨咽喉よまゝと治すカヤシラ

○ 同 竹本の刺糸針をまゝも 忽ちぬくろり亦のごとく

○ 裏出の糸 同ウ

のれ効 咽候この部考へ合す一 鼻の骨ぬきうの効あり

○ 咽喉よ針のまゝと治す 同

○ 咽喉よ拔湯鼻の骨をまゝと治す 同

○ 同鼻乃骨或竹本の刺をまゝとぬく糸カヤシラ

○ 咽喉此痛と治す 同

○ 喉痺腫塞食通ざるを治す喉痺この効あり

○ 咽喉痛ふさぐりたるよ妙糸 同

○ 咽閉ふさぐりたるを治す 三丁シラ

○ 喉痺よ息出ず死せんとするを治す 同

○ 同急よて糸をきと救ふ 同

○ 喉卒よ痛と治す 同

くの効

○ 茶湯の方 ニ方 同ウ

- 薰臍くんさい秘灸ひきうの方 卅二丁しちじふに
- 世淳せじゆんの茶 二方 卅三丁しちじふさん
- 老人世淳らうじんせじゆんと止る法 同
- 又方 刺痲せひまよりし 卅四丁しちじふし
- 唇口吻爛くちびるする瘡くさ付茶 同
- 懷妊くわいにんせざる茶 三方 同
- 月水三ヶ月毎りくると下す茶 卅五丁しちじふご
- くさ茶 同

- くさとし小瘡ひざんと赤あかる車くるま 同
- 頭瘡がしらのくさ付茶 四方 同
- くさの妙茶 三方 同
- 黒瘰くろろの茶 卅七丁しちじふしち
- 蜘蛛くまよ咬うまれする茶 同
- くさりを止る茶 同
- 諸瘡しよそうよて朽く入いる茶 同ウ
- 菌くさの毒どくよ中ちゆう里りするを治す 同

くさ

くさ

同方

同

素灸の方

世八丁方

同方

同

折傷るる素

同

薬酒の方

同ウ

首ぐりるるを懸す法

三法 元九丁方

大霍乱にて口噤死せんとするを救人同ウ

霍乱の脈素

四丁方

四丁目録畢



らの教

藤井呂求子見隆纂集輯
長岡恭齋丹堂校正

○癩瘡

世帯よ三病又ハかといとりよ

一内補散

神の七日よ月也

黄連

川芎

大風子

山椒

若参

右細末して十四貼となり一日よ二クツ用

べし。天目よあ一とい半入一といよせんで二もんよあ

一とい入七ふよせんト用也。右七日分なり。一七日此

肉は大小便は血下る事あるべし。驚くべし。此
黄蘗と服して氣分ありく成る事あり。扱
一七日さて後煉茶とあへるべし

○同煉茶の方

一人参 才女 精氣を補

荊芥 才女 血を去、頭痛を止

苦参 才女 是ハ虫とむさ

龍腦 才女 十月より二月の末まで全分

山海菜 才女 是ハ水鳥の便

梔子 才女 上焦の血とより熱を退

川芎 才女 上焦の血と顔面の

沈香 才女

本香 才女

大黃 才女 白濁より一服浸し

大風子 三斤 皮と去中の

右土味素加減は傳あり素しこれハ茶力失て効な

し又素トやう是ざれば病人の目など盲或ハ取

など素トぬなり。右此茶等細く判合せ茶研

粉よして。右の大黃本香二を才女の粉と天目

よ多二をい入といは素ト。此汁よて右此粉茶と

煉合すべし。此一劑調へ合せ百日のちよ用由べし。

三十日おづく三川は割あせ一薬生といふハ此日

なり。一日よ二夜づくさゆよて用由。三十日よ飲

合するやうは分量を極り空腹も用べー

右の生ものる食物

一 麦飯 右米の飯 焼味噌 大根の糸

大根 越丸 芥菜 糖味噌汁

以上

右の外ハ食禁つーむへー

○癩病妙茶

一 生竹を切て 廁の壺乃中へさし込ん

中へあたまるなり。いさを飲すし治るなり也

○癩病のお二年あより見やう

一 才一子足ふびれあり

一 才二足の立所と覚えん

一 才三大便浩すべー

一 才四一日よ二二夜づくふらひおべー

一 才又面虫の遠ふこく痒るるべー

一 才六目かすも取も喝べー

右六ナ糸れおあつハ命宝丸をつげ用へ

○同病不治の症

一 頰かほ 鼻はなよりたかく言ことなり。白眼あらくまをこ 多おほくハ不ず治ちやうせ

一 足あし黒くろくなりなるも不ず治ちやうせ

一 面おもて一ひと取とむり赤あかなりなるも不ず治ちやうせ

○ 同命寶丸

一 黒大豆くろまめ 又また百粒ひゃくりゅう 右酒みづ浸ひたす 黄蘗わうびやく 生なまとせい黄わう色しき物ぶつと

馳あしるの糞ふん 又また陰いん干かんして酒さけをよて清す 百草ひゃくそう 右みづ酒さけをよて清す

人參じんじん 粉こなはま 馳馬あしうまの血ちをま 麻あしの氣きをよめして陰干かんす

右細末さいまつ 一ひと匙すし 是こゝろをよめして糊をよて丸をなす 朱しゆをよめして衣をなす

とすい茶三病さんびやうハ一日いちにちニ二十粒にじゅうりゅうを天目てんめヨク酢す一

盃はいよて三夜さんやハ月つきのべー。二七日にじゅうしちにちりハ右茶みづを

大服だいふくヨク水みづよて三さん日にちヨクハ米こめを

かく。水みづのくハひやく焼やき塩しほ加くわへて用もちべし。

是こゝろよて腹はら中ちゆうのく色しきあらきもなまをよめして丸をなす

二七日にじゅうしちにちヨクハ一ひと夜やヨク十粒じゅうりゅうづく日にちヨク三夜さんやづく用もちる也

四七日しじゅうしちにちヨクハ十粒じゅうりゅうづく又またハ十粒じゅうりゅうづくよても

一日いちにちヨク又またなまづく用もちる也

右命寶丸めいひやうくわん吞の汁じゆよて化たのく病びやうヨク用もちる也 效くわう能にやう

- 一 産後^{さんご}の味^{あじ}の汁^{じゆ}にて用
- 一 子^この酒^{さけ}にて用 一 虫^{むし}の湯^ゆにて用也
- 一 眩^め暈^まの粉^{こな}にて用
- 一 白^{しろ}血^{ちゆう}の糯米^{もち}の炊^かけ汁^{じゆ}にて用也
- 一 黄^{わう}疸^{たん}の黄^{わう}苓^{れい}を煮^にて用
- 一 疫^{えき}病^{びやう}の葱^{ねぎ}の白^{しろ}根^ねを煮^にて用
- 一 赤^{あか}痢^りの白^{しろ}き罌^{けい}粟^ぼの殼^かを甘草^{かんさく}と加^かへ煮^にて用
- 一 積^{せき}の核^{かく}を煮^にて用
- 一 眼^{がん}病^{びやう}の人^{にん}参^{じん}川^{せん}芎^{きゆう} 沉香^{せんじやう} 木^{もく}香^{かう} 霍^{かく}香^{かう}

- 麝^{じや}香^{かう}を煮^にて用也
 - 一 消^{しょう}喘^{たん}の塩^{しほ}漬^{つけ}炮^{ぱう}を煮^にて用
 - 一 癩^{れい}病^{びやう}の雀^{すずめ}を煮^にて用
 - 一 中^{ちゆう}風^{ふう}の陳^{ちん}皮^ひを煮^にて用也
 - 一 脚^{きゃく}氣^きの芎^{きゆう}芎^{きゆう}を煮^にて用也
 - 一 水^{すい}腫^{しゆ}の芎^{きゆう}芎^{きゆう}の物^{もの}を煮^にて用
 - 一 癩^{れい}癩^{れい}の日^{にち}出^{しゅつ}草^{そう}の汁^{じゆ}といふも濃^濃標^標也
 - 一 夜^やの二十^{二十}粒^粒を七日^{七日}も七^七夜^夜用
- 命^{いのち}室^{むろ}丸^{まる}の加^か減^{げん}

沉香 紫胡 木香 黄芩 丁子 取
 右各を分づかへ用也

○癩疾の名方

赤松家秘方

一細辛 酒製 防风 十二分 牛膝 二分

苦参 一分 沉香 一分 紫象 十分 土用

大風子 一分

右粉よ糊みて●是粉よ丸し白湯にて用

○癩病下し茶

一紅花 一分 黄芩 一分

丁子 一分 驄子の糞 一分

右各粉よし。是个とよ丸し辰砂と交はし。一日
 よ三十粒つ使湯にて吞。服中の悪血下るべし。
 一日よ二夜つ七日用也

○癩病茶

一人参 一分 龍腦 一分 烏蛇 二分 羌活 一分

白蛇 一分 麝香 一分 朱 一分 木香 一分

大黃 一分 地黃 一分 阿仙系 一分 辰砂 一分

丁子 一分 縮砂 一分 金箔 一分

黄連 五 一十七味

右粉こ。大凡子の油あぶらを介まして煉あ一日一きり
づ湯ゆまで用也毒どくなり一秘方也

○癘病ひんびょうの薬 秘方

一蒼耳草そうじそうと端午たんご日又ハ六月六日寅時うまとき病びょうとも
よれて搗つき絞あり其汁みじと煎せんどつりて膏かうとあじ
大鯉魚たいりぎよ壹いち斤余あまあると一ツ腹はらと開ひらて腸ちようと
其そのまゝ置お右みぎの蒼耳膏そうじかうとあじり入い練ねりて版ばん
とあじ合あせ好酒こうしゆ二碗にばん介まと八慢はつまん火ひまで煮ゆて酒しゆ乾かん

さうろ時病人ときびやうじんよあるへ食くさすへ。鯉魚りぎよ一三いちさん塊くわい
月つきと即すなはち愈いよ澄味あいらしみと食くすること百日ひゃくにち介まとすべし

○同方

一牽牛子けんじゆし 皮かわとまり 同 皮かわとまり
他たとまり ちんやき

大黃だいかう 介まり

右粉こよ一つの茶ちや一貼い介まと白湯さかゆまで一日いちにちよ
二夜ふたよつあるへ。但指ゆいが屈かつるよハ素木くすのき此
薬くすりと粉こよ一つの加かふ。効ちやくなくハ山波やまなみ茶ちやもあか
加かへてよ。一つ介まり。介まりて四よ日にちと身み痒かむあるへ。

其時洗ひ茶を仙人茶を刻み袋に入。塩苞
 と二色と釜に入煮し洗てよし。痒みと塩苞と
 丸めりて丸く洗ふなり。いりも天氣暖か目
 なるまで洗ひ。日干すべし。月二夜つ血下しと
 用 大黃 芍薬 牽牛子 枳椇子 各粉
 よし。是と三包よしして酒も。實一包 桑葉
 一包 曉一包 用。但煮を八食と不用。是まで
 りしトろる時ハ 巴豆 大黃 芍薬
 生姜 粉よし。是種丸一一夜よし

止粒了湯よて丸なかり用也。仕色やりの傳ハ
 目ひきつり方もある。指屈して伸るも悪
 伸く屈するハ悪。屈伸自由なるハ好
 右の瘡ハ付茶
 一 塚の草 大蒜丸實 け二色と摺合
 付べし。但愈茶ハ何よてもよし。百日丸間
 婦事と慎べし。
 好物
 于菜 巨膚 ぬか木 蓮 橘 菜

大根 串鮑 薯蕷 鳩 鱧
 鱈 めばる 鱈 藜蘆

右の介何よても堅用由魚く次

○癩病此茶 祕方

一大風子 油とすり 以渣と黄連 黄芩

川芎 大黃 耳草 人參 白芷

香附子 木通 牛膝 忍冬 連翹

香粉よして大風子の油よて ● 皂莢よて一

度よ十二粒つ用由

○同 玄茶

一大風子 黃連 大黃 黄芩 川芎

忘一敷ハ大茶碗よあハ益入四ハ益入二敷ハ四

ハ益入三益入(二敷ハ三益入三益入) 次ハ三益入

○勞咳の茶

一 胡麻 大蒜子 鱧節 味噌 合

炭火よて煉つめ考よ飯ニそ入月也 病状る二月て好也

○勞瘵の方

一 勞瘵の三屍九虫とよ虫と除く法 庚申の

日夕の甲と丸。丑の日足の甲と丸。毎年七月
 十六日は丸聚るる日足の甲と灰を焼て水
 して服すれば。三屍九虫皆滅す。冬に斬三尸し。
 一骨齋虫ある者ハ老よ鰓鱗を食し其骨
 と嚼べし。ハ魚の肉最陰を補ひ神を補ひ。
 骨ハ心能虫と殺す。且其骨を嚼て虫牙の
 痛を止む。故よ一切の虫を治するよ鰓鱗ハ月の
 べし。又骨蒸五痔腸風等の症は酒ハ醋
 まで其外煮て食すべし。心痛ハ用てし。

右鰓鱗ノ主能世人知タルヲナレ正別シテ其能勝レタルヲ
 証シテ治法ノ便トス

○勞心ノ眼 暗を治す

一二月蔓菁花を採陰乾よして細末し。
 井花水よて空心よ二七かど服す妙なり

△むの教 虫くむむこの教考へ合すし

○旬月虫此茶

一竹茹 其下此あまをこをけれ
 梅子此肉よて丸し茶をひく衣とし

○同

一赤藜あやぐやく大耳おほみみ茶あやぐやくか生あやぐやく茶あやぐやくか煮あやぐやくても丸あやぐやくても用あやぐやく

○同

一蛤かきがら大おほ硫い黄わう中ちゆう耳みみ茶あやぐやくか

右各粉みこよ一湯ゆよて用もち

○同名方

一丁子ちやうし肉桂にくけい黄柏わうはく磁粉ちのこ香かう

粉こなよ一〇じふ是こゝかどとは務む漿じやうよて丸まる一いち夜や磁ちの

粉こな七しちかけ白湯さくゆよて一いち夜や二に粒りゅう用もち

○饘しねの糲かくと治ちする茶ちや じじひひややけけるるここももりり

一耳みみ白貝しろがひ くらくらややき 仲貝ちゆうがひ くらくらややき 芎こう藭きやう

右粉みこよ一いち莖きやうの汁じゆうよてつくねつくね十四じふ八はち夜や燒やい入い

煎せん粉こなよ一いち白湯さくゆよて用もち

○虫茶

一古茶こちや 十じゆ五ご本ほん香かう 十じゆ五ご丁子ちやうし 十じゆ五ご胡椒こしやう 十じゆ五ご

右粉みこよ一いち丸まる一いち用もち也なり。こころろりりををくく世せ深ふかよ

塩湯しんゆよて用もち也なり。大おほ人ひと小こ児こももよよりり

○虫茶

一黒大豆くろまめ 十じゆ五ご絲いと 黄わう蘘じやう 十じゆ五ご絲いと 胡こ黄わう連れん 十じゆ五ご

干姜 カンキヤウ 片 ハク 楊柳皮 ヤウリウヒ 片 ハク

右ありよて味嗜大豆と煮^{ユツ}と^ク純煮^{ジュンジュ}和^ワけ
て後益^{コト}酒六七盃^{ハク}入^ケく煮^クド。月^{ツキ}乾燥^{カンバウ}て粉^コは用
世^セ傳^{デン} 霍乱^{クワン} 痧氣^{サキ} 曠^{クワン} 等^{トウ}の妙^{ミョウ}なり

○虫塊^{チュウクワイ} 下^ゲ

一 苦棟皮 クツネヒ 生中 使君子 シキョウシ 中 艾^{アヒ} 藜^{レイ} 生中

船^{フネ}底^{ソコ} 苦 生大 耳^{ミミ} 茶^{チャ} 中生

口^{クチ}傳^{デン}ニ云^{イハ}ひみ味用^ミて^ルり^トる^{コト}ハ^ハ莖^カ本^{ポン} 生中

右^ミ考^{カウ}の^ノ茶^{チャ}二^ニ貼^テ不^フど小^コ児^ニハ^ハ水^{スイ}天^{テン}目^メよ^ヨき^キた^タる

入^イ六^{ロク}七^{シチ}分^{ブン}よ^ヨ煮^シド^クつ^ツめ^メと^ト入^イ入^イハ^ハ食^シ攪^カ入^イ水^{スイ}
を^ヲ盃^{ハク}入^ケ六^{ロク}七^{シチ}分^{ブン}よ^ヨ煮^シ用^{ヨウ}也^{ナリ}。新^{シン}灸^{キウ}あ^ハハ^ハ生^{シヤウ}腦^{ノウ}か
一^{ハク}加^カへ^ヘ月^{ツキ}由^ユべ^ベ一^{ハク}は^ハ傳^{デン}なり^{ナリ}。藥^{ヤク}耳^ニく^クぬ^ヌが^ガど^ト耳^ニ州^{シュウ}
と^トこ^コ一^{ハク}入^ケく^クよ^ヨ一^{ハク}

○虫^{チュウ} 藜^{レイ} 万^{マン}虫^{チュウ} 食^シ傷^{キヤウ} 產^{サン}後^ゴよ^ヨ一^{ハク}

一 枳^シ殼^{カク} 三^{サン}盃^{ハク} 香^{カウ}色^{シキ}ニ^ニ炒^{チヤウ} 香^{カウ}附^フ子^シ 三^{サン}盃^{ハク} 同^{ドウ} 耳^{ミミ} 茶^{チャ} 生^{シヤウ}

右^ミ散^{サン}丸^{ワン}よ^ヨし^シと^ト強^{キヤウ}あり^リよ^ヨて^テ用^{ヨウ}也^{ナリ}

○同

一 延^{エン}命^{メイ}草^{ソウ}の^ノ藜^{レイ} 十五^{ジュウゴ}陰^{イン}干^{カン} 楊^{ヤウ}柳^{リウ}皮^ヒ 日^{ニチ}

陳皮 ちんひ

胡椒 こしょう

粉よー月白べー

○虫下妙薬 血瘀血塊 等ニ用

一人参 ひとじん 縮砂 しゆくさ 芍薬 しやくやく 麝香 じやくかう

共菘 きじゆ 菘木 じゆもく 本香 ほんかう 薰陸 くわんりく

麝本香 じやくほんかう 干姜 かんきやう 苦楝皮 くれんひ 船底苔 せんてい

右調合し一包よーけ煮し月白べー下す

祚のごとく

○胸の痛と止る薬

一延胡索 えんご 六靈脂 りくれいし 等か粉よー湯よて

茶末 ちま 貼かど用。胸虫 むねむし こもり腹よもよし。

痛 いた うちの切こ月白べー

○月 しよ 心痛の薬

一鬱金 うつこん 香附子 かうぶし 香薷 かうじゆ 甘草 かんさう

粉よー湯よて用。一切の胸心痛よよー

○月

一乾姜 かんきやう 良姜 りやうきやう 肉桂 にくけい 各 たが 藿香 くわかう 蒼朮 そうじゆ

厚朴 かうはく 陳皮 ちんひ 甘草 かんさう 本香 ほんかう 茴香 かうかう

枳殼 砂仁 香附子 各

右姜 三片 入く煮し

○蜈蚣咬つるよ妙薬

一香附子と嚼くごきて塗べし立処よ愈又
其咬つる蜈蚣を死て黒焼し水よて解付し妙也

○同即座よ治する法

一紙捻一條を火と燃して整ふる処を
燭よて薫てし即痛止く愈但紙捻を
油を付べし

○虫牙の妙方

一藜芦を細末して虫牙孔よ狹べし神
効あり他は薬を嚼となれ汁を吐かすし

○日妙薬

一川楡の鬚をさし入べし即座よ痛ぬる
又これハ瘡。又し入れハぬるす妙なり

○虫歯と治する法

一薬蕒とすり其汁を痛言此頬へも耳へ
もぬりぬべし。やきて後よけらじし汁

か一取の中よれりてもくもかに奇めなり

○るの嚼るを治す

一雞冠血と傳べ。牡る咬るよハ雌雞の血と

用也。牝る咬るよハ雄雞の血と用也

○月方

一龍の黒焼よ雄黄がー加へるよて解て付べ。

○月

一白砂糖と付てよー_{やけどよもよー}
_{いがよもよー}

うの教

○赤身と治す

_{打撲折傷 墜跌木石所}

一茵陳みい大黃だいおうを 各粉よーをよづ

好酒よて用也。是よ百草ひゃくそうをす加ふれば是と

あひすこりよ赤身あかみ骨ほねたぐひよ好酒よて用也

○赤撲あかぶお傷やぶの妙方

一桐とうの本もと大だい蛇骨へびこつ大だい土器つちぎの粉こな

右細末さいましらす糊かよ押おませ紙しよて張はなり

○赤撲あかぶ骨碎ほねくずるを治す

一楊梅皮やまいちいと煮ゆトてよくたぐ洗あひ其渣すを紙し

すりてたぐひする所よ付て歯を一時をくりりて
碎する骨も愈たぐひする所も速に治る大秘

○赤璞あつみを煮く腫るるを治する方

一 羌活ひねり 黄芩きいろう 大なるを切片きりへぎ 指がごよ

して新き瓦の上よて焙あがり 細末こま 一 即時おすとき 酒よて

二 五ヶど服すへし。一 夜に腫消く痕あとをい

又大豆の粉を付て

○赤躰あつみの薬

一 茵陈いんちん 乳香にゅうかう 没药ぼつやく 穿山甲せんざんこう 各各々

粉より酒よても湯よても用也

○同

一 茯苓ふくろう 麝香せきかう 朱中しゅちゆう 丁子ていし 日鏡にっけい 百み

其竹まいたけ 系けい 六寸廻りむすぢ いたむね 水食みずじき 椀わん よ六をい入

まをいよ煮一用也

○赤身血あかみ 滞どまり 痛いたみ 引ひ 薬

一 的藥てきやくの粉 温飽うんぼの粉

右まぜ合せ緘しん 皮かわ の糊かじ よ砕くだ けー加か へおしませ
ねむくと合せ上あ ちり。紙かみ とすよして塗ぬ べし

愈るるゆめなり

○同のいす

一 蒸 黒焼 川骨 黒焼 沉香 葛粉 麩

赤小角豆 黒やき 煎角 黒やき 榆柳 黒やき

右折つるも折傷するも折赤も酒よて

肩と尻よハ碎かど。下尻よハよきかど

○赤撲の腫るを治す

一 桂心 黄柏 粉は 薬蕒の汁よて付

同

一 小麦のかり 黒焼 酒よて用妙なり

○赤身の茶

一 楊柳皮 細は 輕粉 薯蕒をすり

右二味と作り合せ付へ。早く痛和くくなり

○何よても赤れ骨碎 痛を治す

一 白飯 車菴 胡椒 川芎 附子

肉桂 附子 沃蘭

右粉よて熱酒よてかき豆四ふく用也。痛止

○高きふより流て胸へ血と赤込るを

トす 或家の秘傳なり

一 大黃 白朮 以二味考の煮茶やど一貼

よしして酒よて煎し用也

○ ちりきこり 墜本石よ壓赤れ死るを救方

一 心頭温かる者ハ活べし。先其人を引起し膝と

く活せ平座するごとくは。一人ハ杖を持て控

あげ又よを放て杖と俣し生半長と粉し

鼻の内へ管よて吹入べし活バ生養の汁よ香

油と引入て口中よ灌べし

○ 人よおれ或ハちりきこり墜本石よ壓れて
瘀血滞り痛忍人ガときを治す

一 鶏鳴散

大黃 桃仁 二味各煎し

酒かへて曉鶏の鳴時引由へし。辰の時よ

て瘀血とりて即愈

○ 虎骨或ハ本石よ撲るるよ

一 没薬散

乳香 没薬 川芎 白芷

芍薬 牡丹皮 甘草

右末一盞便に酒を加へて調へ下すべし

一接骨の方ハほの茹て考

○漆よぬけくろ茶

一女竹の葉を焼灰汁よされて洗ふ

○同

一薄荷一味煎して洗ふべし

一巨の葉 陰乾粉よし油よて付るもよし

○牛の出瘡の茶

一赤藜蘼 黒焼 膽礬 水でんして

燭消 硫黄 粉よし油よて付るもよし

粉よし胡麻油とじ温て付べし

○茶のうづきやむ茶

一いのんどれ汁 七盞 茴香の汁 七盞

一椰子油 天目よき盃入て一兩よ蒸つめて

天目よき盃となし。布よて漆すけ渣も骨

接よし。け渣草擦楊梅皮二味と粉よし

合付べし。油ハ万のうづきとやむ

○膿吸膏茶

一猪油ていあぶらを五

唐臘たうろうを五

椰子油やしあぶらを五

緑ろくを五

薏苡仁いらいじんを五

草麻子油くさましあぶらを五

右煉ねらなり

○膿吸乃大妙茶

一車前草汁おまへくさじゆ二盃

草木葉汁くさきばしゆは

烟草汁たばこしゆ二盃

草麻子汁くさましじゆ二盃

椰子油やしあぶら一盃
松脂しょうしか

芭蕉ばせう乃汁のじゆ二盃

唐臘たうろうの

右の汁みづ煮にて布ぬれてこし其中そのうちへせりて入煉いれねら合

と。あつこくハ胡麻油ごましあぶらかー

煎せん蜜みつ流りゅう膿のう吸しつか

○臭くさの毒どくも中ちゆうりてと治す

一金橘きんきつと煎せんト二三夜用也又金橘きんきつを生なまめて二三

食たしてもは乾からハ煎せんト出すべし

○臭くさ乃骨咽こつおん喉のどよ立たてると治す

一六月の土用つちようよへる九日目は根實ねじつとすりて

皂さいと嚙か碎くだき吞のべし

○同 竹木たけぎの刺さし并なら針はり印いんど立たてると患あやち枝えだらす

一六月の日ひよくさ本の糸いととすり陰干かげがしし乾かりて

○ 臭の骨咽は立ちるとき白湯にて用ひ妙也

○ 藁虫の葉

もとの皮虫のうやうやうがとく
むくれるを治す

一 赤小豆粉

收粉

胡麻の油はこねり掌

中又足んなくは墜火にてあふるべし

△ のれ効

咽喉この効考へ合すべし 臭の骨ぬき
うの効あり

○ 咽喉は針の立ちを抜妙業

一 葱の白根と煮し用妙なり

○ 咽喉は痰湯臭の骨を立ちたる業

一 南天の根 黒焼粉より湯よてもあふるても

用也

○ 咽喉は臭を此骨或は竹のこげを立ちるとき

ぬく業

一 救急 縮砂 各 象牙 中 甘草 一

右煮茶のごとく刻み袋に入れは合志くくと

嚙汁を飲べし

○ 咽喉は痛を治す

法 脆熱すれば咽喉冷れが
咽喉久く咳げし或は食をこ

嚙の病となり
或は吐逆し熱の物を食し咽喉痛て

一 明礬 其中へ巴豆 針入

佛ヒキ一ツつまスころス付ル巴豆トとシりの礬ハはクり
とスまシてカーズ小キ炭ヲよテ咽ヘ吹ベー

○喉痺イ腫レ塞ス食ヲ通スるヲ治ス
喉痺
この病

一射ヤ干ン湯ヲ

射ヤ干ン香ク白ク止ム同ク杏仁ト也カ

射ヤ干ン麻ハ犀ノ角ト也カ一ト茶ヲ

右ノ煮メ温メ用ス

○咽ノ喉ト痛ムさシるヲ治ス

一蛇ヲ脱スとシ黒クやキはシ咽ヘ吹ベー妙なり

○咽ノ用スぬスさシるヲ治ス

一礬ノ粉ト桂ト梅トの肉とシ合スるヲ治ス

○喉ノ痺ムよテ息ヲおズ死セんヲ治ス

一腫レるヲ針ヲとシ血ヲとリ其ノ後ト丹ヲ礬トよシ

巴豆ヲ入レくビべー妙ナり丹礬トよシ

○喉ノ痺ム急ニよテ茶ヲをシ用ス

一頂ノ毛トとシすヲ治スるヲ治ス

○喉ノ卒ニ痛ムを治す

一 硼砂カウを粉こなよしふるよて用。又管くわんよて吹ふき入いべし

くの効

○ 茶湯チャウの方 み本八草湯

法の瘡ソウ毒ドクは 功こう能のう温おん泉せん又また腸ちやうをり

一 葉く木のき 救心すいきん 柳やなぎ 苦木くろく木た

本丸木ほんやうのき 是ぜみ本ほんなり

一 荷葉かあ 友瘤ゆうしう 忍冬しのふゆ 石葦せきい

覆盆子蔓ふくふく 連錢れんせん 石菖蒲せきしょうぼ 洗せんを

右何みぎなにきもも一ひと束つかよ切きり黄わうしせん浴あびすべし

○ 茶湯チャウの方

一 葉木くの根ね 石菖蒲せきしょうぼ 根ねををか

塩しほ 水劍草すいけんそう 同どう方ほう 今いま月げつ日にちよ用もちることなり

苦木くろく木た 葉はははり

右みぎみき石いし入い八はち斗とうよ煮にす 后のち風ふう呂りよ入い酒しゆ糟そう

三さん條じょう袋ふくろよ入いく風ふう呂りよ釜かまのりへ押お入い壺ひょうべし

疥身せうしん 痔ぢ 瘡毒そうどく 流りゅう病びやうよよし

○ 薰臍くわんさい秘灸ひきうの方

一 龍骨りゆうこつ 虎骨ここつ 同どう方ほう 南木香なんぼくかう

雄黄 水飛一 辰砂 水飛 乳香

没药 夜明 六靈脂

麝香 五心尖 雄黄の糞 和茴香

大附子 各 巴豆 世し女よむくり 是と月也 香男よハ用ひす

右何れも細末一

一とと麝香を臍の中へ入其上よ大參

生薑 生薑 竹の串よう一味噌と

グーわり其上よ艾と七分の七よ丸め

二火すゆるなり

一又寸廻りよちと三分の竹此粉乃底を箱よて

ちり。右の粉茶一とい入上よも蕎麦の粉とこれ

茶のつこよして●是粉の穴とめ其上よ槐木の

あまもをこを並く其上よきさうこの艾とと三分

よ切炙敷百廿壯すへ色一槐の皮焦いろ

付ハ丸智ここすべ一



初火の灸 艾の灸



次よ百廿壯すへ 艾の灸なり

禁抱

風寒の地 生臭 油氣 寒冷なる地

苦菜乾 生菓の乾 女人とをづく癒るる地

右苦蒿臍の効能

虚勞 勞瘵 百葉よて治難き病を治

又腦不足 腹冷痛 疼氣 熱性束

疝氣 中寒 眩暈 咳嗽

四肢倦怠 不食 夢寐驚覺 子花女

上氣 氣虚 血虚 腎虚

遺精 小便澀 赤白帶下 血塊

死 法濕毒 脚寒 癩痢

健忘 久し弱方 多各奇効あり。其を

養生すすへく百病を除き身命を延るなり

○泄瀉の薬

一本香化降丸

本香 于姜 人参 枳椇 陳皮 沢瀉

黄連 白朮 茯苓 枳殼 厚朴 芍薬

右細末し。是粒よ丸して用也

○又方

一 枳實 枳殼 芍藥 紅花 生薑
 陳皮 枳實 芍藥 紅花 生薑

右細末して・是極よ丸して用

○老人泄瀉と止る法
凡老あとも久泄飲食進まらば
 黄米を炒粉は粉とて食すべし

一 老人泄瀉年と弥て百方効ありなりハ 百

會の元ノ氣カお應よ灸すべし多ハ三四十壯
すへて止なり
 按此病症多原氣弱シテ舉テアタハス故ニ下
 腕シテ泄瀉ス譬ハ滴水器ノゴトシテ瀉ヲ按
 ガレハ水下テ留ズ指テ上テ瀉ヲ按トキハ水内へ吸テ瀉トテ今頭
 ニ灸シテ泄ヲ治スルハ手ニテ滴水器上テ瀉ヲ按法ト同シ詳ニ醫林外
 傳ニ見ヘタリ

○又方 痢病よす

一 健脾散

芍藥 黄柏 陳皮 黄芩 甘草
 粉よしても煮して月由効あり

○唇口吻爛する瘡付薬

一 皂角子 枳殼 各等分 黒焼よして

付るなり

○懐妊せざる薬

一 婦人冷多来るる。考より又七日も遅きよ

牛膝ごう 大肉桂だいにくけい 甲明こうめい 小豆蔻せうとうき 祛痲子びんらうじ
 香附子かうぶし 桃仁とうじん 紅花こうか 中ちゆう
 煮一服す

○月方

一牛膝ごう 生同せいどう 黄き 焦いろう 同どう 黑燒くわいせん 各等分かくとうぶん

粉こな 糊こ 以てもち ● 皂花そうか 以てもち 煎せん 湯ゆ 以て
 晦日くわいじつ 朔日しやくじつ 用由もちよ べし 二十日にじゅうじつ のちハち 煎せん す

○月方

一牛膝ごう 祛蟲砂くわいじゆうさ 各等分かくとうぶん

右何きも粉こな 以てもち 水みづ 以てもち 朔日しやくじつ 毎まい 用由もちよ

○月方 三ヶ月さんげつ ぬりぬり ころと下すくだす 薬くすり

一苗たうき 油あぶら 芍薬しやくやく 川芎せんきゆう 人参じんじん 白朮びやくじやく
 枳殼しやくかく 茯苓ふくろう 各等分かくとうぶん 煎せん 湯ゆ 以てもち

香附子かうぶし を加くわ 入いれ るもよし

○くさとの薬

一あづき 小豆こまめ の粉こな とと うす茶ちや をま じじ めめ 粉こな をま じじ めめ 湯ゆ 以てもち
 加くわ 入いれ 藥くすり 薑きやう 蕪ぶ の汁じゆう 以てもち 解と 付け るま 妙たう なり

○くさとひざん 小瘡せうそう をい 治な るま じじ めめ

一山梔子と末して付ちよくさなれば落す。小
瘡なれど汁よつれと流を落るなり

○頭瘡付茶

一頭瘡痛ずして甚痒よハ楸葉とも汁
とれて塗べし。並処よ知あり。○小児の頭瘡よ
ハ艾葉を灰に焼く傳へし愈しと妙なり

○日茶

一白瘡散

屋上の苔 くらやき 付べし
百くさ乃れよし

○同方

一 藜草

何首烏

董草

地菘

めもぢき

澤浮

各

黒焼よし合せ痒くさよハ栲子の碎よて
付べし。痛む瘡よハ菘葉の汁よて付べし。
又小児の以此瘡よハ胡麻の油よて付べし

○同方

一 小豆の粉 若参の粉 各五分

地膽の汁よて付べし。又藍のおむをよても解。松脂も胡麻の油を加へても付べし。

○ くさの妙茶

一 久しく用うる古き茶袋を炭焼よして胡麻の油よて付べし。妙なり。

○ 月

一 大人小兒とも下痢何方よ出来たりよも泥鯁と汁よして食すべし。愈るる妙也。

○ 同 いうやうのくさよもよし。

一 龍鬚 炭焼 天竺粉 天 膠粉 かい

右胡麻の油よて付べし。

○ 黒癩の茶

一 本丸と二川よりすり付べし。愈るる妙也。

○ 蜘蛛よ咬れたりよ茶

一 早稲葉の灰けよて洗ふべし。

○ くさりと止る茶 諸瘡腫物

一 黄柏 赤小豆 炭焼 大麥 寒の中ニ 蒼朮 炭とさる

各等分粉てに薬蕁えんじゆの汁じゆにて付べし

○猪瘡ぶちうにて朽入くひしりよ茶

一冬蟻いふご 黒燒くろやき 粉こな 粉こな 穴あなの涼すず之の紙かみはは紙かみ押合紙おしかみ

よて強ふさぎ其上その上よ灸きうと三ツ四ツするなり

○菌くまひの毒どくよ中ちゆう里りころと治す

一山梔子くらな くらやき 酒しゆよて用由もちよ或あるは灸きうす煎せん

用ても毒どくを消けなり

○同方

一蠟燭ろうそくと削けて灸きうす用由もちよ

○茶灸ちゆうの方

一麝香じやくかう 神かみ 沉香しんかう 薑かしょう 薑かしょう 陸りく 姜きやう 姜きやう 姜きやう

矢筈やはず 矢や 筈はず 丹に 丹に 艾あ 艾あ 艾あ

右みぎを書かの帛びやくよ包つつこ切き艾あよ灸きうするなり

○同方

一沉香しんかう 粉こな 白檀びやくたん 粉こな 火繩ひなは 火繩ひなは 細こ 細こ 坐ざ 坐ざ

をぐさをひろげ中ちゆうをくがめ書かこめ一ツふせ

やどよ切きり糸いとは油煙ゆえん乃すなは云いか糊かよ灸きうすなり

付つて板いた上の糸いとは灸きうを付つすゆらなり

○くぢきおろす

一塩よて蒸てよー其後骨つぎの葉を付

あひすと酒よて用也

○茶酒延齡固本酒

一丁子 本香 紅花 白茯苓 肉桂

牛膝 各 防風 全 茴香 同

右袋よ入氷砂糖 或百目粉よー袋よ入

焼酒 或米よこ古酒 或米 右の袋よ入七日とき

あがり一日酒をすまー。空腹よ碎かと用也

右の功効

中風 筋絶 七疝氣 腰痛 痰 血塊

眼痛 等よよー右の酒よき佐利へ入風を

ひぬやうよーてとくたり

○前々うらうらと懸らす法

一鼻の下入中の穴よ汁よても灸よても

すべー必ずすよこかへるへー

○又法

一縊るるハ其者を抱く條繩を解れり

ひねの下すじよても温なるバ雞冠血
と口よへへ男よハ雄の血女よハ雄の血即活へ

○月法

一雞の屎此白を此大酒を蓋よ半分
よて解其人乃鼻穴へへへ又藍汁
と灌もよへへ

○大霍乱よて口閉死せんとするを救ふ

一肉桂大 乾姜小 小 霍香中

呉茱萸小

右を貼の目を五分分て袋入振出へ
用ゆ食傷よ甚妙なり

○霍乱の服茶

一霍乱吐止茶を服するとあこハさる
よ菘豆胡椒各四十九粒づ碎研水煎へ
服す若渴甚き時ハ新汲水よて右此
二味粉よへへ飲へ

